対象作品／宮本雅史作『電池が切れるまで』ＫＡＤＯＫＡＷＡ

命の大切さ

弘前大学教育学部附属小学校　三浦一華

私は『電池が切れるまで』という本を読みました。この本を選んだ理由は、一番大好きな本だからです。

この本は、主人公のゆきなちゃんや周りの子ども達が、つらい病気とたたかいながらも明るく笑顔で生きていくという物語です。

私がこの本を読んで、一番心に残っているのは二つあります。一つは、

「おかゆはいや。」

「またひとり、天国にいっちゃったんだよ。」

と、ゆきなちゃんがおかゆをいやがった時に、おもわずお母さんが言ってしまったという会話です。この「ひとり」とは、ゆきなちゃんの友達のことです。病院では、この二人が本当の姉妹だとかんちがいするほどの仲良しでいつも一緒でした。

この場面を読んで、私も自分の命も友達の命もいつ途切れてしまうか分からないけれど、大切にしよう、命だけではなく毎日の日常も大事なんだ。と思いました。もし私がゆきなちゃんだったら、入院の途中で生きるのをあきらめていたかもしれません。なので、いたくても苦しくても、つらくても頑張って生きていくゆきなちゃんはすごいな、私もすぐにあきらめずに見習おう。と思いました。

二つ目は、

「先生、ぼくね、家であばれていたことがあるんだ。」

「でもね、病気になったら、親も、兄弟も、家族のみんながすごくしんぱいしてくれて、ありがたさがわかったんだ。だから、病気はね、神さまがぼくにくれたプレゼントだとおもう。」

と、長く入院している中学生のふじもとくんが言った言葉です。この「先生」とは、病院に長いあいだ入院している子どもたちのための、病院のなかの学校の先生のことです。

私はこの場面を読んで、なるほどと思いました。なぜなら、この本に出てくる他の子ども達は、なんで私だけこんなつらい思いをしなきゃいけないのと悲観的に考えてしまうのに、

ふじもとくんは神さまからのプレゼントだとおもうとポジティブに考えていて、明るく考えることで自分の心も明るくなれるのか。と感じたからです。

この本から私は、人の命の大切さを学びました。本の題名『電池が切れるまで』の電池は、ゆきなちゃんが理科で豆電球の実験をしていた時に、電池はいつでも取りかえられるけど自分の命は取りかえられないことに気づき、それを国語の時間に「命」の詩として書いた、その中の言葉のことです。

わずか十一さいで亡くなってしまったゆきなちゃん。病気がつらくても、明るく笑顔で生きてきたゆきなちゃんを見習って、今日を、一日を、今という時間を大切にしていきたいなと、この文を書いて改めて思いました。